

## 石川謙君著「石門心學史之研究」に對する授賞審査要旨

本書は享保年間、石田梅巖を始祖として京都に生れ出たる心學と稱する一種の教學の沿革に關する研究にして、三編より成る、第一編は、心學思想並に教化方法の發達にして、之を三部に分つ、其一是石門心學の本領と題し、心學といふ名稱とその概念を説き、更に石門心學の思想的根據に關する諸説を擧げてその内容要素を解説し、其二、心學思想の本質に於ては、先づ石田梅巖の思想體系を論じ、次に心學思想の變遷に及べり、其三、心學教化の方法に於ては、知性長養の方法として、講釋、會輔、靜座工夫の三種を擧げ、その教化方法が、會輔及靜座工夫より、漸く講釋並に道話に移る關係を述べたり。

第二編は、心學教化の普及にして、本書の大半を占め著者の最も力を致したる所なり、之を五部に分つ、第一、創始時代（享保より寶曆年間）第二、興隆時代前期（明和より天明）第三、隆興時代後期（天明より享和）第四、教勢分裂時代（文化より文政）第五、教勢衰退時代（天保より慶應）とし、各時代について、先づその概觀を示して、一般社會の情勢と心學の變遷消長との關係を稽へて、その歴史的背景を明かにし、各地方に於ける教化普及の情況を審にせり、乃ち梅巖在世の時代とその直後を創始期とし、次いで手島堵菴を中心とする興隆前期に於てその獨得の統制と組織とによりて教勢大

に伸張し、その後期に及びて、中澤道二、上河淇水兩人の對立によりて、關東關西二派分立の端を開き、次の分裂時代に入りて諸國の覺舎新設多くなると共に、その統制敗れ、やがて衰退時代に入るの顛末を一々根本史料によりて詳かにせり。

第三編、諸藩の教育、教化施設と心學教化については、之を三部に分ち、第一には諸大名旗下間における教化普及の情勢と武家階級における修行の方法を述べ、第二には幕府及諸藩の對心學政策を檢討し、其事實を列擧して委曲を悉し、更に第三には心學教化が藩覺に導入せられたる情勢、並に藩覺の教育組織及び方針と、心學教化の關係とを諸藩について調査したり、尙ほ隨所に掲げたる挿畫は多く著者自身の採集發見にかゝるものなり。

以上を本書の梗概とす、今之を通覽するに、先づその資料の豊富なることに於て、嶄然從來出でたる、この種の書を擢でたるを見るべし、著者が資料採訪の爲めに出張せる地方は、一道三府二十七縣に及び、その蒐集せる資料の數は、無慮千三百餘點に及び、著者は、これ等の資料を審査整理し、之を研究して、各地方に於ける心學講舎の盛衰興亡の年代を明かにし、講舎相互の關係を考究し、その敘述の詳密なるは、圖表地圖と相俟つて、心學教化進展の跡を詳かにし、各時代各地方に於ける教化活動を明かにせり、また上流武家の間に心學教化の進出し、諸藩學覺教育と密接なる關係を結びたる事實を考究し、從來普通には、町人階級に特有のもの、如く解せられたる心學が武士階級にも普及

したることを明かにしたるが如きは、本書に於て初めて見るを得べき特異の點の大なるものとす、又心學消長の各時代に關しては、時代趨勢の變遷が如何に心學の運動と相關せるかを明かにしたる點に於て著者の努力に加へて見識の見るべきものあり、加之寛政以後諸方に藩鬻の勃興せるにつれて、藩學の中に於て儒教各派の對抗漸く多く、幕末には、時勢の動搖と共に學派關係の愈複雑となれる間に處して、心學運動が、この動搖の影響を受けたる始末を明かにせるが如きは、特に多とすべきものあり、但心學教化の方法に於てその靜座並道話の形式と佛敎の座禪談義等との關係の有無に言及せざりしを遺憾とすされども、本書は石門心學の史的研究に於て實に劃期的の業績なりといふべく、本邦社會史の研究に對する貢獻の頗る大なるものあるを認む。